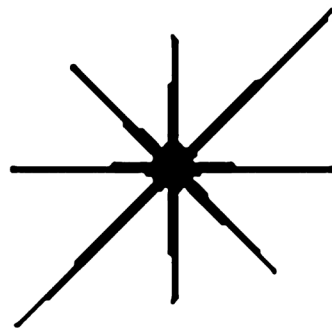


コミット通信 33

[23年4月号特別付録(1)]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

変声譚 4

中村邦生

15 行方不明ブルース

元新聞記者F氏が、かく語る。

——人類の作り出した最高の発明品は何だと思えますか？ この質問は、笑いを誘う答えを期待したものでしょうか？ それならば、今の私は資格がないような気がします。仕事柄これまでいろいろな立場の人にインタビューをしてきましたが、ずいぶん前に同じ質問をあるベテラン映画俳優にしたことがあるのです。かなり大げさな質問で、前もって話の流れを相談しておかないと、相手は考えこんで沈黙が続くことになるだけでしょう。でも彼は大工の家に生まれて、椅子からオーディオ装置まで何でも自分で作ってしまうことが趣味だと聞いていたので、いきなりその質問をしたわけです。

少し思案気な間をおいて、俳優はこう答えました。さる柔らかさと薄さを極めた男性用衛生用品と、繊細な噴水角度を持つ便器の女性用洗浄装置ですね。これが漫才の芸人みたいな軽い口調で述べられたならば、いかにも受けねらいの下卑な笑いにしかならないでしょうけど、そのときの厳めしいほど落ち着いた、響きのよい低い声で、「さる柔らかさと薄さを極めた……」なんて言われると、全人類の発明史を冷静に見渡して得た結論として堂々とそびえる感じで、そのギャップ自体がおかしくて、微笑ましかったです。

まあ、それで、こんな話をしてしまうと、私はこの先どのように質問に答えるか、えらく窮屈になってしまいますが、いまさら気にしても仕方ない。とにかく、続けましょう。

人類最高の画期的な発明品を挙げよと言われて、迷いなく答えられるものが私には二つあります。本と自転車です。では、私が最も愛着を持つ物は何か？ これも答えは同じになります。

ごく最近、たまたまこの二つのものが、まったく異なる場面とはいえ、行方不明の奇縁を結ぶ出来事があったのです。『自転車に乗って』（河出書房新社）という短篇アンソロジーをご存知ですか。自転車をテーマにした話を集めた本ですから、もちろん古書店への処分など考えたことはありません。夏目漱石から萩原朔太郎、小川未明、脚本家の北川悦吏子、精神医学者の中井久夫まで、27人の文章が入っています。

ところが、この『自転車に乗って』という本が、何やらタイトルを地で行くように、自転車でどこかに出かけてしまったらしいのです。いくら探しても行方不明。人に貸した覚えはないし、アンソロジー類は本棚にまとめてあるので、すぐに見つかるはずだったのですがないのです。自転車愛のロック・シンガー忌野清志郎の文を確かめようと思ひましてね。清志郎の「自転車ショー歌」など馴染みのない、ある若いサイクリストに紹介したかったのです。

同じ日の午前の出来事でした。中央公園に向かういつもの散歩ルートの高架道下の道で、杖をついた老婦人が自転車に見入っていました。まだ十分に現役感のある黄色のミニサイクルです。

「おたく様は、ごぞんじですか？ この自転車、もう何日もこのままなんですよ」

細いが品のある声でした。

「ああ、そうなんですか。まだ乗れそうですね。鍵がこわされていますけど」

「そうなんですか。じゃ、どうして捨てたのかしら」

ゴミ捨ての常習の場所らしく、「不法投棄は犯罪です」と大書した看板がありました。自転車はフランスのルノー製ですが、販売店のシールも登録票も見当たりません。わざわざ削り取るような面倒なことをしたのでしょうか。

「いえ、捨てたのじゃなくて、誰かが盗んで、ここに乗り捨てたんですよ。大事な自転車が行方不明になって、きっと持ち主は悲しんでいるでしょう」

「まあ、いやですね。この自転車も悲しんでいますよ。うちの息子は防犯連絡員をしているので、話をしておきます」

黄色のミニサイクルが何か寂しげな孤影を放っていたのは、捨犬の姿を感じさせるからだったかもしれせん。

翌週の初め、自転車は消えました。安堵はしたものの、すこし喪失感もあって、自分が預かってよかったかもしれないという思いも、ふとかすめたりもしました。そのせいか自分の家の庭に、深夜ひっそりと置かれている夢までみたりしたのです。

妙な符丁というべきか、自転車がどこかに運ばれた日に、『自転車に乗って』が戻っていることに気づきました。カーブを曲がり切れなかったときに似た、横倒しの自転車の格好で本棚に収まっていたのです。さっそく忌野清志郎の文を読んでみました。「自転車はブルースだ。クルマや観光バスではわからない。走る道すべてにブルースがあふれている。楽しくて、つらくて、かっこいい、憂うつで陽気で踊り出したくなるようなりズム」とあります。なるほど、サイクリングはブルースなのか……、私は心のうちで呟きながら右ページに視線を移すと、角田光代のエッセイ「これからは歩くのだ」と題する文の結びが載っています。

「きっと今後の私の人生に、自転車という乗り物は存在しないだろう」というただならぬ予告文です。友人を待って自転車に寄りかかっていただけなのに、近くに行く老人が転倒し、その責任の当事者にされて大騒ぎになった冤罪事件のエピソードが記されていました。この本には事故や盗難の話も目立ちます。私はちょっとブルーな気分をひきずり、「これからは歩くか」とあらたな呟きをもらしたのです。

しかし、この後の話もあるのです。さらに数日して、同じ場所を通りかかると、またミニサイクルが放置してありました。遠くから見ると黄色なので、一瞬、あの自転車のミステリーじみた謎の帰還を想像しましたが、形は似ているけどベージュ色でプロプロス製です。やはり持ち主の登録票は読み取れず、しかも前輪の空気が抜け、やや歪みも出ていました。前の自転車と異なり、盗難ではなく廃棄したものだと思います。修理は可能な傷み方でした。とにかくよく似たミニサイクルの不可解な出現に遭遇しても、自転車好きの私としてはこの偶然を愉快に思う余裕はありました。

ところがその日の夕方、パソコン脇の台に積み上げた本の頂上を見ると『自転車に乗って』が置かれ、しかも黄色の付箋がたくさん貼ってありました。どう見ても自分の持ち物とは思えなかったのです。

いったいどこから紛れ込んできたのか。実際、書棚には行方不明と思いこんだ先の同じ本が収まっていた。何かが行方知らずになってしまう喪失の出来事は不安を掻き立てるけど、見知らぬ何かのいつの間にかこつぜんと現われてしまう、そうした増殖の変事の方が気味悪いし、夢魔を呼び寄せるような気がします。

16 信用できない私

「ブラック・ノート」の笠間保が、かく語る。

——措辞への意識の度合いは、人によって違うのは当然としても、自分自身においてもそのときどきでこだわり方が揺れる。いまパプアニューギニアのハイランドの小さな町に身を置き、日本語の環境から遠く離れているせいかもしれないが、いざ原稿を書こうとするとたびたび言葉につまずき、足がもつれるような、あるいは上気した頭でぼんやり空を見つめるような何とも落ち着かない気分が翻弄される。ことによると、こんな僻処でゴーストの話などを書いたせいかもしれない。

閉山したはずの銅鉱石の採掘場の作業小屋で仮眠をとった旅の男が人声で目を覚ます。すでに黄昏の時間になっていて、無人小屋のはずが、声だけが薄い壁板から染み出てくるように聞こえる。反対側に回りこみ、自分も声を発した瞬間、煙のように男は壁に吸い込まれた。板の中には見知らぬ者たちがうごめいている。そこからは仮眠をとった部屋を覗くことができ、隅の方で別の男が身を横たえている。見たことのある顔だ。自分の顔か？　すると……、いや、この先はいいだろう。亡霊に敬意を欠いたせいとなれば、いまさらどのような対応をすればいいのか。もとより書いた作の出来不出来とは無縁の事態だ。

で、その措辞の話に戻るのだが、断じて使いたくない言葉というものは誰でもあるだろう。私の場合は「生きざま」というやつだ。中桐雅夫はこの言葉に反発して、それこそ罵倒するに等しいほどの嫌悪を示す詩を書いている。どれほどぶざまな日々であれ、それは生き方なのであり、「生きざま」ではない。「死にざま」からの類推で生まれたこの言葉に私も気色の悪さを感じて、出くわすと気分がざらつく。

若年層が多用する強調語「めっちゃ（めちゃくちゃ）〇〇」も同じだ。サッカーでも野球でもスポーツ観戦後のインタビューで人々が連発する、「感動をもらいました」という物乞い的な常套表現も厭わしい。「めちゃくちゃ感動をもらいました」となれば、聞いていて落ち着かないことこの上ない。もっとも、ご当人たちはすこぶる上機嫌で言っているのであるから、とやかく言う筋合いはないだろう。

困るのは肝心な人称にも、しっくり感を持たないことだ。一人称にしても、20代のころは、狂気を生き延びる道を教えてくれたある大作家にならって「僕／ぼく」をもっぱら使っていたのだが、あるとき急に「私／わたし」に切り替わった。決定的な理由は判らないが、たぶん自分の嫌いな作家や評論家たちにかぎって、意外にも「僕／ぼく」を連発する傾向が多く、違和感から避けたのだろうと思う。

ならば、「私」でいいのかとなるが、これも何かしっくりしない。「日本語は天才である」と言った人がいるが、主語の省略が可能な言語に助けられているとも言えるだろう。しかしこれはどうやら自称の選択の問題ではないらしい。

発話主体としての「私」がそもそも浮遊状態でうろうろ、おろおろ、ふらふら、何につけ気まぐれな意識の惑いと揺れのうちにあるのだ。そうした行き迷う不安感にぐらつく「私」が「信用できない語り手」となって、皮肉にも手ごたえのある言葉を求め、措辞へのこだわりを示すのだが、この試み自体もまた終わりなき宙づり状態にあるという仕儀なのだ。

17 ひーふーみー、よいむなやー

アルコール類はからきし受けつけない男なのだが、珍しくフルーツカクテルなどを飲んだせいか、口は軽くなり、話も逸れたり戻ったりを繰り返す。B 大学を2年前に定年退職したその志村邦彦が、かく語る。

——それからどうなったって？　このこと、まだ話してなかったか。で、授業の合間に岩殿観音ま

で散策に行くと、いつも境内の大銀杏に手をあてがって、何やら呪文のようなことを呟いたりはそのんだけど、霊妙なことなんかぜんぜん思い浮かんだことはないよ、大銀杏の推定樹齢は700年、周囲は11メートル、その樹肌に手を置いて、いや、呟くというより、とりとめない思いに捉われたりするんだ。

靴紐がほどけて足がもつれちゃって、すぐにこけるようじゃ、大安吉日でも今日はサマージャンボ宝くじなど買わないほうがいいなとか、朝がた庭で見かけたぶち猫は、蛙によく似た顔に見たが、それなら猫によく似た蛙も存在しているはずだとか、銀行のCDで4度もピンコードを間違えた後、行員がカステラを持って自宅へ見舞に訪れた夢を、中央公園のベンチで懐かしく思い返しているのはなぜかとか、まあ、そんなたわいないことが頭の芯から滲み出てくるのが面白くて、大銀杏に触ってみる習慣があったのだけど、でも、ちょっと生真面目な言い方をするなら、この場所に心惹かれた理由は、およそ1400年までさかのぼる歴史の古層を感じとれたからじゃないかと思う。

岩殿観音は通称で、埼玉県東松山市の真言宗智山派の寺院なんだけど、正式には正法寺と言い、奈良時代の養老2年の創建らしい。鎌倉時代初期に、比企能員ひきよしかずが源頼朝の命で再興したと伝わっている。表参道から石段を登った中ほどに仁王門があり、左右に仁王像が立っていて、なかなか勇壮な姿だよ。

江戸の初めくらいの話かな、川越の相撲大会でこの近郷の連中は毎年早々と負けてばかりいたんだって。けど、ある年に金剛兵衛、力士兵衛と名のるめっぽう強い若者が岩殿からやってきて、並みいる強力ごうりきどもを次々となぎ倒した。その日は、岩殿観音から仁王さん二人が消えていたそうなんだ。村の名折れとばかり、駆けつけたわけね。

そういえば、平安初期の坂上田村麻呂の伝説もあって、岩殿山に悪竜が住み着いて、あたりを荒らしまわり、人を見ると胴で締め上げ、尾で地面に叩きつけては喰らいつくという狼藉ぶりで、村人は恐れおののいていた。その噂を聞きつけた東征中の坂上田村麻呂が立ち寄り、竜退治に乗り出すというわけさ。田村麻呂は観音堂にこもって助力を乞い、祈りを捧げる。するとまた真夏にもかかわらず、雪が積もった。でも、崖の一角だけ地肌が見えるところがある。これは竜がいるところを観音様が教えてくれたのだと信じ、矢を放つ。黒雲が湧き、突風が吹き寄せてくると同時に、悪竜が現われ、矢は右目に深々と命中していた。田村麻呂は二の矢で左目をねらい、瞬時に飛びかかって太刀で喉元を突き刺した。格闘の末、ついに悪竜も力尽きたという言い伝えなんだ。

坂上田村麻呂の蝦夷征伐の話なんか、中央政府のご都合で作り上げた東征譚に過ぎないけど、それはとりあえず措くとして、打ち取った竜の首を岩殿山のふもとに埋めたところ、そこがいつしか水を湛えた池となり、「弁天沼」になった。しかし、竜の首が沈んでいるものだから、蛙が住み着かない。だから、人々は「鳴かすの池」と今でも呼んでいて、そばに榎の古木もあるし、ここも私の散歩コースだった。

「鳴かすの池」は岩殿観音から参道を下り、九十九川の橋を渡った畑の中にあるんだ。この岩殿観音はかつて江戸から川越経由で大勢の参詣者がやってきたようで、参道には門前町の賑わいを感じさせる宿や遊郭跡らしき建物も残っていて、境内下の丁字屋旅館は昭和の初めまで営業していたという記録があるし、玄関の上には、日本橋馬喰町とか蔵前とかグループで来た参詣者の名札がかかっている。もちろん男衆は観音詣での精進明けに色遊びをして帰ったんだろう。参道脇には旅籠屋などのほかに、往時をしのばせる元鍛冶屋の表示をつけた家もあったりするんだ。

私の働いていたB大学のキャンパスは、そんな面白い場所の近くにあったわけだけど、岩殿山を突っ切って直線距離で西へおおよそ2キロの位置にJAXAの地球観測センターがあって、巨大なパラボラ・

アンテナが並び、最新鋭の機器をそろえて観測衛星からの地球環境の情報を分析している。中世の竜退治の伝説のあるところと、先端科学技術を駆使している場所との対比がなかなか愉快じゃないか。

その「環境」のテーマで言うのなら、南側の500メートルほどのところだけど、こども動物自然公園の敷地内に大学付属のピアトリクス・ポター資料館があって、イギリスの湖水地方のヒルトップ農場の家を再現したもので、もちろんピーター・ラビットが主人公ではあるけど、ポターはナショナル・トラスト運動に大きな役割を果たした人だしね。それと何といても忘れてはいけないのは、北へ4キロくらい行った都幾川沿いにある丸木美術館でしょう。丸木位里・丸木俊の「原爆の図」くらい世界各地を巡回している作品はないと思うほどだけど、その意義の大きさはともかく、私はむしろ位里の妹の大道あやの絵にとっても心惹かれていた。この丸木美術館は財政難で危機的な状況にあって、大学が支援しなくちゃだめだと何度も歴代の学長に提言やら直訴したけど、いつも空返事ばかり。理由は実にくだらない狭量な問題だったと推測できるけど、まあ、予想通りの結果だった。

それと、岩殿観音の隣の物見山に埼玉平和資料館、鳴かすの池から3キロくらいのところには、1500万年前の地層から出てきたサメの化石なんかが展示してある化石と自然の体験館があるし、その近くにはかつて秩父セメントが貨物輸送に使っていた廃線敷なども残っているんだ。

何の話だったっけ？ そう、だから大学キャンパスはこうしたユニークな場所の交差点点にあったのに、この時間軸を貫く重層した歴史的な意味に、残念ながら当時の大学関係者は無自覚のままだったんだ。個人的なキャンペーンを繰り返しても、志村のやつはまたわけのわからない妄言を吐いているって、そこで話は行き止まりですよ。

樹齢700年の大銀杏、悪竜に坂上田村麻呂、鳴かすの池、仁王像、ピーター・ラビット、JAXA、丸木位里・丸木俊、秩父セメントの廃線敷などといったものだけでも重ね合わせてみれば、時間軸が揺れて、虚構と現実が混淆する幻惑的な面白さがあるはずでしょう。

いや、一人重要な人物を忘れていた。さっき述べた岩殿観音に関係したことで、再興に貢献した比企能員の存在です。やれやれ、ここでようやく話したかったことに近づいたみたいだね。

ところでさ、この店、さっきから気になっているんだけど、わざわざメニューにみそ汁が入っているね。これって流行りなの？ 違う？ そうか、知らないか。どうしてかという、昨日ね、池袋西口のロマンス通りの路地を歩いていたら、〈熟女バー、ゆきこ〉という店があって、入口の宣伝文句に、〈アラフォー美女、ただいま出勤中、おいしい味噌汁、ご用意してます〉とあったわけね、だからみそ汁のことに興味を持ったわけなんだ。おふくろの味なんかを売り物にするアラフォーって、誰が心惹かれるのかな？ 若者かい、それとも年寄りかい？

わからないか。ごめん、比企能員のことだったね。源頼朝の乳母だった比企尼の甥でもあったから、幕府に重用されて有力御家人になったけど、頼朝の死後、ライバルの北條時政に謀殺されてしまったわけだ。それで、孫の比企員茂が能員の菩提を弔うために岩殿山の南東の中腹に判官塚を築いたのだけれど、700年ほどたった1980年代半ばに、B大学のキャンパス拡張工事によって潰され、新たな土地に移設した経緯がある。その塚というか祠は、私が長年過ごした研究棟の土地にあったらしい。形ばかりのお祓いはしたようだけど、何事もないはずはないと思う。実際、妙なことがあったんだ。夜になると、研究棟の薄暗い廊下を武者姿の亡霊が出るという噂があってね。でも、うかつというか何というか、当時の私はこうした話を知らなかったし、関心もなかった。

ただし、気がかりなことがないこともなかった。この研究棟に所属する教員たちは、なぜか在職中あるいは退職直後に亡くなる者が多くいたんだ。外国語学部の英語教員が57歳、東大から着任し

た国際関係学部のイラン研究者が69歳、東洋哲学の教員が66歳、ドイツ語教員が68歳、イギリス人教員は定年退職1カ月後に70歳とか……、他にもいるけど、いちいち数えるのもういいや。

亡霊の恰好は、見たと証言する者によって違っていて、鎧姿だとか、兜をかぶっていたけど顔がなかったとか、経帷子きょうかたびらだったとか、髪を下ろし、右手を突き上げ、憤怒の形相だったという者もある。ただ、こうした武者姿の亡霊のことを伝え聞いたのは、私自身が異形の何者かの気配を実際に感じたあの夜の出来事の後で、とにかく因縁めいた話など、ほとんど知らなかったんだ。

今から15年ほど前の晩秋の夜のことでね、大学祭の終わった翌日の休校日で、昼間でも人気はあまりなくて静まりかえっていた。夕方には、研究棟にいる人はなくなっていたけど、私は急ぎの仕事があって夜遅くまで部屋に残り、気が付くと10時を少し回っていた。念のためトイレに行ったついでに、在室表示の電光パネルを確かめると、私のところだけ心細く光っているのが、何か不吉な感じだった。

帰り支度を始めたころだったか、遠くから廊下を重々しい音を引きずるように進んでくる人の気配がしたんだ。ひどく緩慢な近づきかたが、かえって気味悪くてね。とっさにドアの鍵を確かめたり、武器になりそうなものを探したりしたけど、そんなもの何もありはしない。たまに守衛さんが見回りに来ることがあるけど、部屋の明かりがついていると、ドアの外で「ご苦労さまです」と声をかけてくれたりして、「ありがとうございます」と答える遣り取りをするんだけど、それだけで安心感があった。でも、このときはどう言っているか、得体のしれない重い軋み音を引きずって、何者かがゆっくりと私の部屋に近づいてくる、妙に濃密な気配を感じたわけなんだ。

耳を澄まして身構えると、なぜか足音も止まる。おそろおそろ帰り支度を始めると、鎧が軋むのか金具がこすれる音がして、とにかく重々しく体を運ぶ音がゆるやかに近づいてくるのさ。そんなことを何度か繰り返しているうちに、ドアの外でびたりと足音が消え、かすかに息遣いが聞こえる。何者か判らない存在の息の根がこれほど怖ろしいとは知らなかった。気が動転しながらも亡霊だとはっきり認識めいたものがあったのは、こいつはドアも壁もすっと通り抜けてくるに違いないと確信していたせいだよ。

でもね、このときの心境はけっこう複雑で、怖ろしくはあったけど、すべてが誰かの仕組んだ冗談にも思えたわけなんだ。だから今にして思えば、次にとった奇異な行動は、そうした訳の判らない意識の反映だったかもしれないね。

どうしたか？ まず部屋の明かりを消したわけ。暗闇の中に身を潜めていれば、こちらだって闇の住人だぞって、仲間を偽装して対抗する感じでね。ところが、外からドアノブを回す音があって、この行動は逆効果だったか、と一瞬にして後悔の冷汗で、いよいよ扉を素通りして部屋に入ってくるぞって覚悟した。それで、これもまた自分でも意外な行動だったんだけど、いきなり怒りにかられた犬の吠え声わえこゑが口をついて出たんだ。そう、犬の声がね。怒りの喧嘩声、威嚇の吠え声、遠吠え、甘え鳴きとか、だいたい10種類くらいの犬の声の使い分けができて、子どものころから数少ない得意芸で、この声色には自信を持っていたわけさ。何しろ、成年でもあるからね。

それで、ドアの外に向かって、最大限の吠え声を犬になりきりになって、胸にたっぷり空気をためこんで、ウォー、ウォーン、ウォン、ウォン、ウォン、ウォ、ウォ、グガー、ウォン、ウォン、グオー、グガー、あっ、みなさん、すいません、こんな店の中で披露することはなかったですね。驚かせてすいません。はい、はい、わかってますよ。失礼しました。

で、何だっけ？ そう、犬の声色ね。どれくらい続けたのか、はっきり覚えてないけど、無我夢中だった。本当は、四つん這いになって、顔を上に向けて吠えると一番それらしい効果的な吠え声が出

るんだけど、さすがにそんな余裕はなかった。でも驚いたね、その後、武者の亡霊らしき者の気配は、ゆっくり遠ざかっていくのが判った。それでも警戒を解かず、息を殺して耳を澄ましていると、いきなり研究室の電話が鳴りだして、度肝を抜かれたんだけど、何かその電話音が日常的な意識に戻るよすがのような役割を果たした気がする。

ふといま思い出した。トマス・ド・クインシーの『『マクベス』における門を叩く音について』というエッセイがあったね。マクベスがダンカン王を殺害して日常の時間は停止してしまい、外界との関係は断絶し、暗黒の世界になったわけだけど、王殺しをした夜の明け方、誰かが城の門を叩いている音が聞こえるわけだけど、その音こそが日常的な時間が闇の世界に流入し、生の鼓動を回復させ、これによって殺害者マクベスを孤立させる効果があると述べたんだけど、ちょっと大げさかもしれないことを承知で言うと、電話の音が夢魔のような時間を断って、日常的な意識に戻す働きがあったような気がする。それでも、実際はちょっとちぐはぐな事態で、守衛室からの電話連絡だったんだ。

「こちら、守衛のタキザワですが、何かご用ですか？」

こちらから電話をかけた覚えはない。

「いえ、とくにありません。そろそろ帰りますので、研究棟の施錠をお願いします」

「そうですか。では、西口扉からお帰りください。ほかは閉めてありますので」

夜の坂道を駐車場に向かうとき、いつでも犬の威嚇の吠え声が出せるような態勢を作っていたのには、我ながらおかしかった。

しばらくして日数がたち、教職員の小宴があった折に、この武者の亡霊話を隣に座っていた総務課勤務の相撲部の Y 監督に話してみた。

「また、出ましたか。それは比企一族の怨霊ですよ」と大きな身体を縮め、Y さんは囁き声で身を寄せながら、こう助言してくれたんだ。「早くお祓いをしてもらわないとダメですよ」

「お祓いですか？」

「そうです。3カ月くらい前、宇田先生も悪霊祓いの祈祷をしてもらいましたよ」

「環境科学の宇田先生が？ それは知らなかった」

「いちいち人に伝えることでもないですから」

「効き目はあるんですかね」

そう私が言ったとたん監督は顔をしかめ、大ジョッキのビールを飲みほした。

「志村先生さ、そりゃないよ。信じなきゃ、どんなことだって効き目なんかあるはずないでしょ。はい、この話はこれにて打ち止めです」

反対隣に座っていた日本史の K さんが、とりなすように話に加わった。

「志村さん、やっぱり祈祷してもらったほうがいいと思いますよ。私もいっしょにお願いしたいんで、どうですか？ 実は前からちょっと気にはなっていたんで、いい機会だし」

「そう、それが、いいですよ」と監督は言い、使い込んだ革のポシェットから手帳を出した。「日取りを決めてください、最初は私が神主さんに連絡をしておきますから、あとはよろしく。坂田八幡神社の宮司さんです」

「あの一、坂田さんは、稲荷神社じゃないですよ？」

「志村さん、何を言ってるの。八幡神社だから、稲荷のはずはないじゃないですか」

K さんは慌てた口調で言った。

「いや、キツネと犬は折り合いが悪いもので……。私は、成年なんですよ」

「八幡様ですから、だいじょうぶですよ。じゃ、とにかく手配しておきます」

そんな遣り取りのあった後日、坂田神社の宮司から電話があり、神棚を含めて神具は持参するが、供え物を用意しておくように言われた。米、塩、神酒、頭付きの鯛、昆布、果物、榊の枝などだった。

宮司は50歳前後の度の強そうな眼鏡をかけた瘦躯の男だった。白装束に着替えてからの所作の一つ一つが意味ありげで、最初に白木の神棚を組みたてるときも、ところどころで何やら呟き、手を合わせる。おもむろに供え物を八足台に並べたところで、いよいよ始まるかと思ったが、その前に神主に促され、米を半分ほど持って外に出た。軽く米粒をつまんで研究棟の四隅に置き、お祓いをした。短く祈祷があり、塩がまかれた。

私の研究室に戻り、悪霊払いの大幣が大きく振られ、「^{はら}祓へたまえ、清めたまえ」と祝詞がとなえられ、声も次第に甲高くなっていった。Kさんの研究室でも、ほぼ同じ順序で儀式は進んだが、途中でなぜか棚から古文書の資料が落ちると、坂田神社の神主はそちらに向き直り、なおいっそう大幣を勢いよく振った。

祈祷が終わり、次の場所に移動しながら、「きましたね」とKさんが小声で言うと、「はい、きてますね」と宮司は冷静に応じた。

最後に研究棟全体の悪霊除伐のために選んだのは、2階踊り場に面した場所で北側の上下階段と東西南の通路が交差する建物の中央だったが、神棚の台を組みたてているとき、宮司は急に手を休めてしゃがみ、床と壁の隙間を覗き込んだ。

「この割れ目、小さくはあるのですが、ちょっと気になります。ガムテープみたいなもので結構ですが、何かありますか。こうした隅っこのひび割れから悪霊や怨霊が侵入してくることがあるんです。祈祷が終わったら、はがして大丈夫です」

「ありますけど、ガムテープなんかでいいのですか。とにかく、すぐに持ってきますね」

Kさんは小走りで研究室を往復した。

大幣が激かに左右に振られ、最初こそ前の二室と同じように、「^{はら}祓へたまへ、清めたまえ」と落ちて音吐朗々と祝詞が始まったが、しだいにクレッシェンドの度を強めるにしたがって、右肩が下がり出した。それを戻そうとすると、今度は左に身体が傾きすぎる。声は上ずり、裏返り、喉を絞った尖り声となり、恐怖の冷感が私の背筋を走り抜けた。横に立つKさんの様子を窺うと、目を閉じ、唇を震わせていた。

休日の研究棟には誰もいないはずなのに、男性教員と女性教員の二人が甲走った声の響きに部屋から誘い出され、いつの間にか背後に並んで手を合わせていることに気づいた。祈祷は悲鳴のような、怒りのような、威嚇のような、嘆きのような声となって目まぐるしく変幻し、ついには白い衣装がまるで風を受けたようになびき、「ひーふーみ、よいむなやー、こーとーもちろーらーねー」と悪霊封じの呪文とともに、宮司の身体が前に崩れたが、かろうじて膝を立て大幣で空気に渦をつくるような所作で激しく振った。しばらくするとその勢いのまま立ち上がり、意外にしっかりした足取りで、私たちの左側から背後へ声を絶やすことなく回りこみ、神棚の前に戻ると声をゆるやかに鎮めていきながら、拍手を打ち拝礼した。こちら側に向き直った顔は上気し、額にうっすら汗が光っていたのを覚えていた。

「これにて、終わらせていただきます」

「身が震えっぱなしでしたよ。あれほどの迫力ある声になるとは、いや、驚きでした」

と私は素朴な感想をもらした。

「はい、これほどの抵抗があったのは、私も初めての経験です。祈祷をやめさせようとする邪気がたくさん襲ってきて、押し返すのがたいへんでした。ご覧になったでしょうが、一度は圧倒されかかっ

たんですけど、おかげさまで何とか持ちこたえました」

「これで、研究棟の悪霊退治になったわけですね。ありがとうございました」

「いえ、それは違うのです。退治はしていませんし、それはできません。ここからお引き取り願っただけですから」

軽口めいた挨拶とは裏腹に、私の思念は別のところにあった。当初、私の気分は好奇心の促すままに取り留めなく漂っていた。ところが宮司の祝詞の聲が勢いを増すにつれて、私は息を殺し、固唾をのんで見つめ、あたかも一つ一つ声の折節と刻一刻の動作を深く身の内に吸収していくような思いだった。名づけることのできない、何か超越的な存在との触れ合いという忘れがたい体験に立ち会っていたのだ。

「邪魔しに来たのは、やはり比企一族の武者姿の亡霊でしたか？」

Kさんは玉串料を渡しながら訊ねた。

「いえ、それも違います。武者たちの怨念に取りついている悪霊です」

「そうですか。悪霊や妄霊は、人間の怨念を好餌にしているということでしょうかね」

Kさんはひとり呟くような口調で言った。

バス停に向かう帰り道、口数の少ない私に向かって、Kさんはこんな話を付け加えた。

「志村さん、例の夜の研究室のことだけど、武者の亡霊を犬の吠え声で追い払ったと言ってましたね。実を言えば、それは正しい方法だったんですよ。ご承知かな、私の前任校は、鹿児島でした。専門は古代史ですけど、薩摩藩のことも調べていました」

「もちろん、存じ上げていますよ」

「それで、薩摩藩が参勤交代で江戸に上る道中、行列の先頭を進む薩摩隼人は、十字路や道の角にさしかかると、犬の吠え声を発したんです。悪霊はそうした場所に潜んでいるので、隼人たちは犬の吠え声をあげて邪気を払い、それで行列は進んだというわけです」

「そうだったんですか」

「はい、ですから、その特技は大事にした方がいいですね」

とKさんは笑い、その冗談めいた言い方に続けて、自分でも犬の鳴き声の真似をするのかと思っただが、それはなかった。

坂道を歩く私たちの影が重なっては、樹影に吸い込まれたが、なぜかそんなことも清新に感じられた。

と、まあ、こんなエピソードだったけど、本当に話したことなかった？ はい、そのことなただけど、祈祷のすんだ後、当然というか不思議というか、在職中に亡くなる教員はいなくなった。私も何とか無事に定年まで勤めあげたしね。何でしょう？ ああ、犬の声ことね。いやいや、幸か不幸か、そんな特技を発揮するチャンスなんかないよ。暗い夜道の十字路にさしかかったときなんか、たまに頭をかすめたりはするけども、それだけのことです。そう、言い忘れていた。いつの間にかお祓いに加わっていた男女の教員のことだよ。「あの人たち、見たことないね、誰かな」って、しばらくしてKさんに訊かれたんだけど、私にも覚えのない人たちだった。二人そろって幻の人影に遭遇したのかもしれない。そんなことって、まれにあるものだと思う。

18 虫愛ずる姫君よ、助けをこう

庭隅の菜園でくたばりかけている青虫が、かく語る。

——青虫なんだから、まだ幼虫ということになるわけだけど、成虫と同等の独立した存在と考えて

ほしいんだよね。信じてもらえなくても結構なんだけど、生存戦略も生存のための言語も確かなものがあるし、幼いというのは誤解なんだ……、などと威張ってしまってから、実は情けない窮地におちいったことを言わなければならない。

昨日からアブラナの葉をたらふく食べ過ぎたせいで、うかつにも地上に向かって身を投じるかのような、ひどくぶざまな恰好で落下してしまい、元いた葉っぱのところなんかに戻るのはとても望み薄なので、地を這って、何とかヤツデの木までたどり着こうと身をよじらせてみたものの、まずいことに黒蟻の行き来する道を横切ることになってしまった。

あわてて何気ないふりをして、やがて羽化してアゲハ蝶になり、優雅に空を舞うすがたを懸命に思えば、自分が自分を励ましたりもしたけど、でも何だかそれは滑稽な様子にも感じたりしているうちに、くさいくさいと嫌がられているツノが一匹の蟻に触れてしまった。

その瞬間、蟻のやつが幸運な餌食の出現に狂喜して、いきなり喰いついてきて、小さい体をしているくせに噛みつき力の強烈なこと尋常ではなく、痛いなのありゃしない。しかもそれを合図にぞろぞろと仲間が集まってきて、いちいち数えたわけじゃないけど、十数匹はいただろうか、そのなかには嬉しさと喜色満面のやつもいたり、実に憎たらしくて、あなたは黒蟻の笑い顔なんか見たことはないだろうね、顎を外して顔全体を平たく歪めて笑うんだけど、その醜怪さたるや、あなたら人間と勝負だと思う。

そこでこの時のために保存しておいた悪臭の液をツノの先から噴射したところ、悔しいことに効き目がぜんぜんなくて、それどころか軟らかい胴体は反りかえって、命の残りを抱きしめるように丸まってしまい、威嚇用のくさい液などじゃ、たちうちできない。逆に蟻どもの毒が緑色の表皮から全身にじんわり回り出して麻痺が広がり、いたるところだらしなく弛緩し、我が身は仰向けに伸び切ってしまったのだけど、それでも、「そうか、自分の青い肉の長さはこれほどあったのか」なんて、のんきな身体サイズの自己認識に至ったりしたが、その拍子にふとひらめいたことがあり、それはこういう危機に瀕したら、あの姫さまに助けを求めろという古くからの有難い言い伝えなのだ。

「ひめよ、ひめ、けしきだちたまへ、いざ、ここなるいのち、たすけたまえ」と呪文をとなえると、『堤中納言物語』のあの本家本物の元祖虫ガールとして知られる「虫愛ずる姫君」が、千年の時空を超えておいでになるというのだ。けれど、悲観的な思いもあり、きれいな蝶になるような青虫なんかには関心がなくて、もっぱら恐そうな毛虫を溺愛しているということらしい。

この期に及んで、姫君のことをあれやこれやといちいち詮索しても、いかにも詮無いことではあるけれど、噂話を聞くだけでも、この青虫の心でさえわくわくと興奮してしまうのだ。しかも会ったこともないのに、いまにわかには姫が旧知の間柄みたいに感じられ、あれこれ想念が走るのはどういうわけだろう。

毛虫って、かわいいし、それに、手のひらに乗せて、じいっと見ているとわかるけど、何だかとても思慮深そうな姿というか、動きというか、雰囲気というか、そんな感じがあるじゃない、理解できない？ じゃ、父と母と同じね、やさしくて娘思いの人たちで感謝はしているけど、やっぱり世間並みの考え方の人なもの。

と、まあ、こういった具合に、姫があくまでも虫好きを貫くのは偉い、と青虫の立場であれ、しみじみ感じることしきりで、姫の若い侍女たちはお世話しようにも、気味が悪くて、恐れおののき、右往左往するばかりなのだ。虫など恐がりなどしない身分の低い雑用係の男の子たちを近くに呼んでは、虫集めを楽しんでいるし、世間一般の女性の化粧などにも興味はなく、お齒黒も無視、眉の毛も抜かず、それこそ目の上に毛虫が乗ってるような、げじげじ眉毛で気にもとめないらしいのだ。

こんな異彩を放つ虫好きのはみだしお嬢様に、からかい半分で興味を寄せる上達部^{かんだちめ}のボンボンがいて、帯の端を巧みに細工し、動く仕掛けまで工夫した上、ある小動物にそっくりなものを袋に入れ、懸想文をそえて贈ったところ、姫と侍女たちが大騒ぎになった。袋から蛇が鎌首をもたげて現われたのだ、父が駆けつけると巧みな偽物とわかるのだけれど、ここでちょっと青虫として気になるのは、この蛇の偽物は青大将というやつなのかどうか、そうならば、ひどくそわそわ落ち着きをなくしてしまうわけで、まだ会ったことはないのだけれど、同じ青色の生き物として雄大な姿を誇っているらしいと仲間から伝え聞いていたからだ。

ついでに教えてもらったところでは、なぜ人間が蛇に対して違和感や恐怖を感じるか。若いときに薬師を志したアベノキミフサという物書きは、手足がなくのっぺりと胴体ばかりで、日常性から断絶した「欠如」からくる恐怖心だと言っているとのことだが、本当だろうか。それなら青虫だってほぼ似たような形をしているし、「虫愛ずる姫君」を例外として、ふつうは毛虫を毛嫌いしたり恐がったりするのは、「欠如」じゃなくて、もしかしたら余分のものが生えているせいではないか。

まて、まて、いったい自分は何を考えている？ 今は早く呪文をとなえるべき緊急事態ではなかったか。

もし、もし、あなた、聞いているかな？ 誰だか知らないが、そのあなたですよ。何がおかしいんだい、いま笑っている場合じゃないのだ。働き蟻たちが、頑丈で勤勉な顎をせわしなく動かしているではないか。

それでは、助けをお願いすることにしよう、「ひめよ、ひめ、けしきだちたまへ、いざ、ここなるいのち、たすけたまえ」。どうだろう、来てくれるだろうか……、だめか、やっぱり。虫愛ずる姫君よ、ここに救出を求める青虫がいる、毛虫だけをえこひいきしないでくれないか。

蟻さんたちよ、せかせかしないで、もう少し一息入れるくらいのペースで働いたらどうなの、勤勉に動く顎だね、そいつがこの緑のふくらした胴体をくわえて、あんたたちの穴へ分担して運び入れる作業をすることになるんだね、きっと地下の穴倉は命の残骸が重なり合う豊かな貯蔵庫だろう。この青虫、願ってもない新しい収穫物になるわけだ。

おい、蟻たちよ、胴体が半分入ったまま、動かなくなってしまったな。この先は図体がかさばって難しくはないか。何かじわりじわりと痺れてきたけど、どうなっているのか。体を曲げて入りやすい角度になってもいいが、ここまで麻痺しているんじゃ、できるはずもない。何だろう？ おや、聞こえるぞ、若い女性の声だ。誰かといっしょらしい。

あれ、あれ、間に合わなかったみたいだね、この状態じゃ、うちの邸^{やしき}の庭に運んでも、もはや助からないね、それにしても、蟻たちの集団の力はおそろしいほどじゃないの。男の子たち、みんなどうする？ せっかくいっしょに来てもらったけど、ねえ、ケラオ、ヒキマロ、あなたたちの考えは？ そうだよ、蟻たちの立場も考えないといけなし。じゃ、青虫さん、歌を一首置いて、これにて帰ります。

蟻 せわし
虫 息ほそく
横たふか
行く春のひる
日だまり 悲し

執筆者について――

中村邦生(なかむらくにお) 1946年生まれ。小説家。小社刊行の主な小説には、『チェーホフの夜』(2009年), 『転落譚』(2011年), 『[幽明譚](#)』, 『[ブラック・ノート抄](#)』(いずれも2022年)などが、批評には、『未完の小島信夫』(共著, 2009年)がある。